

ヨエル書とラオデキヤ的セブンスデー・アドベンチスト教会 — 第四十六号

Jeff Pippenger

2026-02-12

第四十六番

カイサリア・ピリピからカイサリア・マリティマまでは第三時から第九時までの期間を表し、それは第六時で区分される。カイサリアからカイサリアへのその区切りは、変容の山であった。変容の山は、ペンテコステの「日曜法」に先立つこと五日前の三段階の道標に、他の二本の線を符合させる。

山上において、父なる神は二度目に御声を発せられた。最初に御声を発せられたのはキリストの洗礼のときであり、最後に御声を発せられたのは十字架の直前であった。

今、わたしの魂は騒いでいる。わたしは何と言おうか。父よ、この時からわたしをお救いください。だが、まさにこのためにこそ、わたしはこの時に至ったのだ。父よ、御名を栄光に輝かせてください。すると天から声があって、「わたしはすでにそれを栄光にした。さらに、ふたたびそれを栄光にする」と言った。そこで、その場に立っていてそれを聞いた群衆は、雷が鳴ったのだと言い、ほかの者たちは、御使いが彼に語ったのだと言った。ヨハネによる福音書 12:27-29

神は、十四万四千人に印を施され、彼らにご自身の御名を書き記されるとき、ご自身の御名を栄えさせられる。

勝利を得る者を、わたしの神の宮の柱とし、彼はもはや外に出て行くことはない。わたしは彼の上に、わたしの神の御名と、わたしの神の都の名、すなわち天から、わたしの神のもとから下って来る新しいエルサレムの名を書き記す。さらに、わたしの新しい名を彼の上に書き記す。耳のある者は、御霊が諸教会に言われることを聞きなさい。ヨハネの黙示録 3章12、13節。

変容の山において、そこに臨んだ弟子はペトロ、ヤコブ、ヨハネの三人だけであり、彼らはヤイロの娘の復活のときにも、またゲツセマネにおいても同様であった。ゲツセマネは、ヨハネ福音書第十二章で御父が語られたのと同様に、十字架の直前に来た出来事である。「ゲツセマネ」は「油搾り」を意味し、乙女たちの油の試練を指し示している。ゲツセマネは、魂を「死と直面させる」ための「危機」であり、賢い乙女たちはその試練を通過する。というのも、イエスが三十日の間「顔と顔を合わせて」教えられたとおり、第二神殿の試練において彼女たちは命と直面したからである。

父なる神が最初に語られたのはキリストの洗礼においてであり、キリストが初めてペトロ、ヤコブ、ヨハネの三人だけをお連れになったのは、ヤイロの十二歳の娘が復活させられたときであった。十二歳の童女の復活は、復活の力を象徴するキリストの洗礼と照応する。ヤイロの娘の復活は、キリストの洗礼およびカイサリア・フィリピと照応する。ゲツセマネと、十字架の直前に父なる神が語られたときのキリストの動揺とは、カイサリ

ア・マリティマと照応する。

「行に行、規則に規則」の原則に従えば、ペテロは、シモン・バルヨナの名がペテロへと改められる際にカイサリア・フィリピで封印される十四万四千人を表象する。パニウム（すなわちカイサリア・フィリピ）で封印を受けると、ペテロは山の第六時へと赴き、そこで旗印として掲げられつつ、なおも進んで海辺のカイサリアにいるコルネリオの召しに応える。カイサリア・フィリピにおいて、ペテロは神の印と、宣べ伝えるべき真夜中の叫びのメッセージを携えて、エクセターのキャンプ集会を後にする。ラッパの祭りによって表象されるイスラムのメッセージが、ペテロを海辺のカイサリアへと導く。イスラムのメッセージは、ペテロを世界の目に触れるところへと高く掲げる。というのも、ペテロはラッパの祭りに先立って、イスラムの預言的到來を予告していたからである。

見よ、主の大いなる恐るべき日が来る前に、わたしは預言者エリヤをあなたがたに遣わす。彼は父たちの心を子どもたちに向け、子どもたちの心を父たちに向ける。わたしが来て、この地を呪いで打つことのないように。マラキ書 4章5-6節

ライン・アポン・ラインにおいて、エリヤのメッセージは、父たちをその子らと一致させることを前提とするメッセージである。エリヤは父ミラーであった。彼は自らの子らを例証している。十四万四千人はウィリアム・ミラーの子らであり、ミラーの心をその子らに向けることは、ミラー派の歴史をエリヤの歴史と整合させることであり、また、バプテスマのヨハネを十四万四千人に関わる使者と整合させることである。これら四つのラインの整合における一要素は、エリヤ、ヨハネ、ミラーのそれぞれの試練の歴史において、唯一の現在の真理は、使者を通して与えられたメッセージであった、という点である。

ギレアデの住民の中のテシベ人エリヤはアハブに言った。「私が御前に立って仕えるイスラエルの神、主は生きておられる。私の言葉によらなければ、この数年の間、露も雨も降らない。」列王記上 17:1

ホワイト夫人は明言している。イエスによってエリヤと同定されたヨハネのメッセージを受け入れなかった者はイエスの教えから益を受けることがなく、また、第一天使のメッセージとして表象されるミラーのメッセージを拒んだ者は第二天使のメッセージから益を受けることができなかった、と。エリヤが雨は自分の言によってのみ降ると宣言したことには、エリヤのメッセージかバアルのメッセージかを選べとの命令を含む、究極の試練が伴っていた。「how

long」という預言的象徴は、カルメル山におけるエリヤの出来事を日曜法と結び付ける。

アハブは全イスラエルに使者を遣わし、預言者たちをカルメル山に召集した。エリヤはすべての民のところに来て言った、「あなたがたは、いつまで二つの意見のあいだによるめくのか。もし主が神であるなら、主に従え。もしバアルが神であるなら、彼に従え。」しかし民はひと言も彼に答えなかった。するとエリヤは民に言った、「わたし、ただわたし一人が主の預言者として残っている。しかし、バアルの預言者は四百五十人いる。だから、彼らに雄牛二頭を我々に与えさせよ。彼らは自分たちのために一頭を選び、それを切り分け、薪の上に載せ、火をつけてはならない。わたしはもう一頭を整え、薪の上に載せ、火をつけない。あなたがたはあなたがたの神々の名を呼べ。わたしは主の御名を呼ぶ。こうして、火をもって答える神、その方こそ神であるとしよ

う。」民はみな答えて言った、「よろしい。」 列王記上 18:20-24

カルメルでの試みは、二つのメッセージのいずれを選ぶかということであった。真と偽の預言、すなわち使者であるエリヤか、イゼベルの食卓に着いていた預言者たちか、という試みであった。それは使者とメッセージをめぐるものであった。1844年に、主はミラーを真の預言者として、またミラーのメッセージを露と雨として明らかにする試みをもたらした。カルメルが繰り返された。真の預言者と真のメッセージと、偽の預言者と偽のメッセージとの区別は、エクセターの野営集会において、エクセターの天幕とウォータータウンの一団の天幕によって表された。偽に対比される真を表す二つの天幕であった。カルメルでなされた区別と1844年の歴史は、カイサリア・ピリピにおいて、ペテロが印を受け、旗印として山に掲げられるときに、明確にされる。彼は、自らのメッセージこそ後の雨の唯一の真のメッセージであると主張していたがゆえに、掲げられた。彼の予言が成就したとき、彼は掲げられた。

ラッパの祭りは、五旬節期における第三の、しかも試金石となる祝祭であり、その試金石に先立って、ペテロは、真夜中の叫びの宣布の開始を画するしるしとして、イスラムが解き放たれることを指摘する。預言の成就こそが、ミラー派とプロテスタントとの区別を生み出したのであり、プロテスタントは、見過ごされつつあるかつての契約の民を代表している。真偽の区別が明らかにされたのち、エリヤは自ら偽預言者たちを殺した。この区別は、イスラムに関する預言が成就する時、すなわちラッパの祭りにおいてなされる。

ミラー派の歴史における「真夜中の叫び」は、修正されたのちに成就した予告であった。それは1844年10月22日に成就したが、これに対してミラーが当初理解していた「真夜中の叫び」は1843年であった。サミュエル・スノーはそのメッセージの修正を体現し、彼のメッセージは「真の真夜中の叫び」と呼ばれるメッセージとして知られるようになった。

1844年は、ミラーのメッセージとプロテスタントのメッセージとの区別の例証であった。試練の過程において、プロテスタントはミラーによって斃され、彼らはやがて背教的プロテスタンティズム、ローマの娘たち、イゼベルの祭司たちとなった。その区別は、預言的メッセージの受容か拒否かによって顕在化した。ヨハネとミラーにおいては、預言的メッセージが、退けられつつあったかつての契約の民の偽りのメッセージを暴露した。エリヤのメッセージは、彼の言葉によらなければ雨は降らないと主張し、三年半の後、その主張の検証が明らかにされるはずであった。

アハブがエリヤを見たとき、アハブは彼に言った、「イスラエルを悩ます者はあなたか。」彼は答えた、「イスラエルを悩ましているのは私ではない。むしろ、あなたとあなたの父の家である。あなたがたが主の戒めを捨て、あなたがバアルに従ったからだ。それゆえ今、人を遣わして、全イスラエルをカルメル山に、またバアルの預言者四百五十人と、イゼベルの食卓で食事するアシェラの預言者四百人とを、私のもとに集めよ。」 列王記上 18:17-19

偽と真のいずれであるかの区別は、それが使者であるか、その伝える言葉であるかを問わず、言葉と使者の双方に対する告発を含む検証の過程においてなされた。イスラエルを悩ます者であると非難されたのはエリヤであった。彼の預言の言葉によって雨が止められ

ていたからである。もしイスラエルに雨が降り続いていたなら、エリヤに関して問題は提起されなかったであろう。この問題は、エリヤの預言と、その三年半にわたる成就に基づいていた。

ペテロが、ラッパの祭りであり、また驢馬が解かれる場所でもあるカイサリア・ピリピにおけるリトマス試験に臨むとき、真夜中の叫びのメッセージの始まりが標示される。エリヤになぞらえられるペテロは、自らの予告の確証をいまして目撃し、また、真と偽との峻別が万人の目に明らかに示された。その予告の確証は、リトマス試験であるラッパの祭りによって表象されている。その予告は、1840年と1844年の双方において予表されており、そこでは予告が修正され、その後成就する。ジョサイア・リッチによって修正された予告は1840年8月11日に第一の天使に勢いを与え、また、ミラーによる1843年という年の予告はスノーによって修正された。

「1840年には、予言のもう一つの顕著な成就が広く関心を呼んだ。その二年前、再臨を宣べ伝える指導的な説教師の一人であったジョサイア・リッチが、『黙示録』9章の解説を発表し、オスマン帝国の没落を予告した。彼の計算によれば、『この勢力は……1840年8月11日に打ち倒される。そのとき、コンスタンティノープルにおけるオスマンの権勢は打ち砕かれると見込まれる。そしてこれは、私の考えでは、事実であることが判明するだろう』。」

まさに定められたその時に、トルコはその大使たちを通じてヨーロッパの連合列強の保護を受け入れ、こうして自らキリスト教諸国の支配下に身を置いた。この出来事は予言を正確に成就した。それが知られると、多くの人々がミラーとその協力者たちが採用した予言解釈の原則の正しさを確信し、再臨運動には驚くべき弾みがついた。学識と地位のある人々も、説教と彼の見解の出版の双方でミラーに加わり、1840年から1844年にかけてその働きは急速に拡大した。『大論争』334、335。

リッチの予言はイスラムに関するものであり、スノーの予言は閉ざされた戸に関するものであった。リッチの予言が成就したとき、そのメッセージを確立した方法論が受け入れられ、メッセージを受け入れた者たちは使者と「一致」した。予言の成就において、メッセージと使者の双方が認められた。リッチの予言はイスラムに関するものであり、スノーの予言は閉ざされた戸に関するものであった。

私は、神の民が期待に満ちて喜びながら主を待ち望んでいるのを見た。だが神は、彼らを試みようとして決めておられた。預言の期間の算定にあった誤りを、神の御手が覆い隠しておられた。主を待ち望んでいた者たちはこの誤りを見いだせず、その時期に異議を唱えていた最も博学な人々もまたそれに気づかなかった。神は、ご自分の民が失望に遭うように取り計らわれたのである。期日が過ぎ、救い主を喜びの期待をもって待っていた者たちは悲しみ、落胆した。一方、イエスの現れを愛してはおらず、恐れからそのメッセージを受け入れていた者たちは、期待された時に主が来られなかったことを喜んだ。彼らの信仰の告白は心に及ばず、生活を清めることもなかった。期日の経過は、そのような心をあらわにするのにふさわしいものだった。彼らは、真に救い主の現れを愛していたがゆえに悲しみ失望している人々に、真っ先に背を向け、嘲った。私は、神がご自分の民を試し、試練の時にたじろいで退く者を見分けるために厳しい吟味の試練を与えられたことのうちに、神の知恵を見た。

イエスと天のすべての軍勢は、魂の愛する方である彼をひと目見たいと甘美な期待をもって切望していた者たちを、憐れみと愛をもって見守っていた。天使たちが彼らの周囲にとどまり、試練の時に彼らを支えていた。天からの知らせを受けることを怠った者たちは暗闇に置き去りにされ、天から彼らに送られた光を受け取ろうとしなかったゆえに、神の怒りが彼らに対して燃え上がった。主がなぜ来られなかったのかを理解できず失望していた忠実な者たちは、暗闇のままにはされなかった。彼らは再び、預言の期間を調べるために聖書へと導かれた。主の御手がその数字から取り去られ、誤りが明らかにされた。彼らは、預言の期間が1844年にまで及ぶこと、そして、預言の期間が1843年に終わると示すために彼らが提示していた同じ証拠が、むしろそれらが1844年に終結することを証明していることを見いだした。神の御言葉からの光が彼らの立場を照らし、彼らは「たとえそれ（幻）が遅れても、それを待て」という遅れの時を見いだした。彼らはキリストが直ちに來られることへの愛のあまり、真に待ち望む者たちを明らかにするために意図されていた幻の遅れを見落としていた。彼らは再び、ある期日を得た。だが私は、多くの者がその激しい失望を乗り越えることができず、1843年に彼らの信仰を特徴づけていたほどの熱心さと活力を持つには至らないのを見た。

サタンとその天使たちは彼らに勝利を収め、メッセージを受け入れようとしなかった者たちは、それを自ら「惑わし」と呼び、受け入れなかったことを先見の明ある判断と知恵によるものだとして自賛した。彼らは、自分たちに対する神の勧告を退けていることに気づかず、天から与えられたメッセージを実践していた神の民を混乱させるために、サタンとその天使たちと手を結んで働いていた。

「このメッセージを信じる者たちは、教会で虐げられた。しばらくの間、このメッセージを受け入れない人々は、心の思いを行動に移すことを恐れによって抑えられていたが、期日が過ぎると、彼らの本心が明らかになった。彼らは、預言の期間が1844年まで延びていると、待ち望む者たちが負わざるをえないと感じていた証言を、黙らせようとした。信者たちは自分たちの誤りを明確に説明し、なぜ1844年に主を待ち望んだのか、その理由を示した。反対者たちは、提示された力強い論拠に対して何ら反論を持ち出すことができなかった。それでも教会の怒りは燃え上がり、彼らは証拠に耳を貸さず、その証言を教会から締め出されて、ほかの人々がそれを聞けないようにしようと決めた。神が彼らに与えた光を他の人々から隠しておくことをあえてしなかった者たちは、教会から締め出された。しかしイエスは彼らと共におられ、御顔の光のうちにあって彼らは喜んだ。彼らは第二の天使のメッセージを受ける備えができていた。」『初期の著作』, 235-237.

ペテロは、リッチにならいイスラムと一つの王国の終焉に関する訂正された予告を提示する十四万四千人を代表し、またスノーにならい、閉ざされた戸についての訂正された予告も提示する。イスラムの第二の災いについてのリッチのメッセージは外的な予告であり、スノーの閉ざされた戸は内的な予告であった。スノーにとって、その働きは、主が数から御手を取り去られたときに始まり、そのとき、かつては1843年を証明すると考えられていた同じ証拠が、実際には1844年10月22日を証明することが見いだされた。リッチの側では、成就したときに黙示録十章の御使いが地と海の上に立つべく下って来ることをもたらしたのは、一つの計算であった。

リッチがその成就の十日前に自らの予測を再計算したという事実は、先の予測を訂正するという業が一つの試金石であることを示している。一八四〇年に始まり一八四四年に終わるという事実は、実際には、真の真夜中の叫びとなるように再計算された予測の預言的象徴なのだろうか。真夜中の叫びの宣言をもって結ばれたミラー派の歴史のアルファとオメガは、十四万四千人の真の真夜中の叫びの預言的特質を実際に予表しているのだろうか。

訂正された予言の宣布の二つの時期のいずれにおいても、ミラー派のメッセージに対する論争が顕在化した。というのも、そのメッセージが民衆を騒がせたからである。ペテロがカイサリア・ピリピにおいて立ったとき、カイサリア・ピリピ以前に始まっていたメッセージをめぐって論争が生じる。というのは、そこに、雨のメッセージが降り注ぐのはペテロの言葉によってのみであることを確証する成就があるからである。カイサリア・ピリピはラッパの祭りに当たり、第二の天使を表す二人の弟子をキリストが遣わして、イスラムのろばのつながりを解かせることと符合する。イスラムのろばのつながりを解くことは、エクセターのキャンプ集会における真夜中の叫びのメッセージの開始を告げる。というのも、開会日に到着することなく遅延し、馬に乗って一日遅れの八月十三日に到着したサミュエル・スノーが、遅延の時の終わりと、十七日に集会が終わったとき津波のように伝えられていくことになるメッセージの始まりとを画したからである。

ミラー派の歴史における論争、アハブ王の非難、そしてキリストがエルサレムに入城された際に詭弁を弄するユダヤ人の抵抗は、いずれも、驢馬が解き放たれる時、すなわちラッパの祭りにおいて終局に達する一つの論争を指し示している。驢馬が解き放たれることは、初めにカイサリア・ピリピにおいてアドベンティズムに対する閉ざされた扉を、また期間の終わりにカイサリア・マリティマにおける閉ざされた扉を指し示す予言の確証である。驢馬は、テネシー州ナッシュビルを含むアメリカ合衆国を撃つ、第三のわざわいとしてのイスラムの象徴である。2020年7月18日の失敗した予言は、主が御手を取り去り、イエス・キリストの啓示の封印を解かれるにつれて、いまや段階的に是正されつつある。その啓示の封印が解かれることは、2023年7月、荒野において始まった。

ダニエル書第十一章の幻視

ラッパの祭りは、第七のラッパを表しており、これは第三の災い、すなわちイスラームである。ラッパとは、戦いを告げる外的な警告のメッセージであるが、聖会への内的な招集の呼びかけとしても理解しうる。第二神殿の試験の三十日が満了するときに始まるリトマス試験として、それは外的であり内的でもあるメッセージである。第一の基礎的試験は、ダニエル書11章14節に表されている反キリストの外的な幻視とともに、2024年の春に到来した。

また、そのころには多くの者が南の王に逆らって立ち上がる。さらに、あなたの民の略奪者たちも、幻を成就させようとして高ぶる。しかし、彼らは倒れる。ダニエル 11:14.

直前の節においてパニウムが導入され、パニウムに関する証言は十五節に至るまで続く。

北の王は帰還し、以前のものよりも大いなる軍勢を整え、幾年かの後、必ず大いなる軍勢と多くの富を伴って来る。ダニエル書 11:13

第十節から第十五節における「北の王」は、教皇権の代理権力である。1989年11月9日のベルリンの壁崩壊によって型示された「鉄のカーテン」という壁の撤去の時、第十節ではその代理権力はロナルド・レーガンによって表象された。第十六節は、日曜法における政教分離の壁の撤廃を標示する。第十一節と第十二節は2014年に始まったウクライナ戦争を表し、第十三節は2024年の選挙を指し示している。すなわち、レーガン以後八人目の大統領であり、また先の七人に属する第八の大統領でもあるトランプが、より大いなる力をもって「復帰する」のである。彼が復帰するとき、「彼は前よりも大いなる群勢を繰り出し、しかも幾年の後に必ずやって来る」。この「幾年」とはジョー・バイデンの四年間のことである。

2024年以後、第13節と一致して、ローマはパニウムの預言的歴史に介入するであろう。2025年5月8日、霊的栄光の地から出た最初の教皇が選出され、彼はレオという名を選んだが、その名は多くの重要な預言的特質を帯びている。そして第15節において開戦となる。

こうして、北の王は来て土塁を築き、最も堅固に囲まれた町々を攻め取る。南の軍勢はこれに抗しえず、南の王の選り抜きの者たちもまた抗しえない。抗する力は少しもない。ダニエル書11章15節

十五節においてパニウムの戦いが開戦され、ドナルド・トランプによって象徴される地から上ってくる獣が南の王国を撃破するであろう。十一節の南の王は、教皇権の代理勢力であるウクライナと戦争を開始したが、そのウクライナは、十節の教皇権の代理勢力—すなわちアメリカ合衆国—によって資金提供と支援を受けていた。南の王はラフィアの戦いにおいて勝利を収めるであろう。しかし、その勝利の余波において、南の竜の王国の没落に常に随伴する漸進的瓦解が進行し、かつてないほど強化されて帰還してパニウムの戦いに備える北の王の前で、南の王を極度に脆弱な地位に置く。2014年、アメリカ合衆国がウクライナ戦争を開始した時、ロシアとプーチンは南の王であった。2022年には侵攻が開始され、流血が始まった。2024年、北の王が帰還した。

ペテロはいまカイサリア・ピリピにおり、そこは「真夜中の叫び」のメッセージの宣言の始まりである。ペテロは、エリヤおよびリッチとスノーに代表されるミラー派にならって、かつて「閉ざされた戸」とイスラームに関する予言を掲げていた。その成就是、真の後の雨のメッセージと偽の後の雨のメッセージ、ならびに真の使者と偽の使者との区別を明らかにする。ペテロのメッセージは、ナッシュビルとイスラームに関する修正されたメッセージであり、彼がカイサリア・ピリピに立っているとき、彼はパニウム、すなわち第十六節の「日曜法」へと至る戦いの地点に立っているのである。ペテロの予言の成就是、イスラームが解き放たれる時に「真夜中の叫び」の宣言の始まりを指し示し、また、線に線を重ねる原則においては、それがパニウムの戦いが到来する時でもあることを明らかにする。

ダニエル書第十章の幻視

ラッパの祭りは、第七のラッパを象徴しており、それは第三の災い、すなわちイスラームである。ラッパは警告の合図であり、また聖なる集会への召集でもある。さらに、それは、第二神殿の試みの三十日が満了すると開始されるリトマス試験でもある。反キリストに係る礎となる外的試みの第一の幻視は2024年の春に到来し、ダニエル書10章に表されているように、キリストに係る内的試みの第二の幻視は2026年に到来した。

そのとき私は目を上げて見た。見よ、亜麻布を身にまとい、腰にはウパズの精金の帯を締めた、ひとりの人がいた。そのからだはまた緑柱石のようで、その顔は稲妻のように見え、その目は火のともしびのようであり、その腕とその足は磨かれた青銅に似た色で、その言葉の声は群衆の声のようであった。

私ダニエルただ一人がこの幻を見た。私と共にいた人々はその幻を見なかったが、大いなるおののきが彼らに臨み、彼らは逃げ去って身を隠した。

それゆえ、私はただひとり取り残され、この大いなる幻を見た。私のうちには力が全く残らなかった。というのも、私のうちにある麗しさは腐敗へと変じ、私は力を保つことができなかったからである。

それでもなお、私は彼の言葉の声を聞いた。私はその言葉の声を聞いたとき、うつ伏して深い眠りに陥り、わが顔は地に向いていた。

見よ、一つの手が私に触れ、私を膝と掌とに身を支えさせた。彼は私に言った。「おおダニエルよ、大いに愛された人よ、わたしがあなたに語る言葉を悟り、起ち上がってまっすぐに立て。今、わたしはあなたのもとに遣わされたのだ。」彼がこの言葉を私に語ったとき、私は震えおののきつつ立った。すると彼は私に言った。「恐れるな、ダニエルよ。あなたが悟ろうと心を定め、あなたの神の御前で身を悩まそうとしたその初めの日から、あなたの言葉は聞かれ、わたしはその言葉のゆえに来た。しかしペルシアの国の君が二十一日のあいだ私に立ちはだかった。だが見よ、首位の君たちのひとりミカエルが私を助けに来たので、私はそこでペルシアの王たちと共にとどまっていた。今、わたしは、終わりの日にあなたの民に何が臨むかをあなたに悟らせるために来た。というのは、その幻はなお多くの日に関わるからである。」彼がこのような言葉を私に語ったとき、私は地に顔を向け、口がきけなくなった。

そして、見よ、人の子らの似姿のような者がわたしの唇に触れた。そこで、わたしは口を開いて語り、わたしの前に立っている者に言った、「ああ、わが主よ、その幻のゆえに、わが苦悩はわたしに臨み、わたしのうちにはもはや力が留まっていない。わが主のしもべであるこのわたしが、どうしてこのわが主と語り得ようか。わたしに関しては、たちどころに力はわたしのうちに残らず、息さえもわたしのうちに留まっていない。」

そのとき、再び、人の姿に似た者が来て、わたしに触れ、わたしを強めた。そして言った、「大いに愛されている人よ、恐れるな。あなたに平安あれ。強くあれ、まことに、強くあれ。」彼がわたしに語り終えたとき、わたしは強められ、「どうぞ、わが主よ、お語りください。あなたがわたしを強められたからです」と言った。ダニエル書 10:5-19.

第二十二日に、ダニエルは終わりの日における天の大祭司の幻を見る。ローマが幻を確立するという幻は、2024年の基礎となるアルファの試験であった。キリストの幻は神殿の試験である。これによって、ダニエルから逃れて身を隠す者たちという一群がより分けられる。その一群は偽りと虚偽の陰に身を隠し、このゆえに強い惑わしを受ける。

ダニエルはその後、三度触れられる。第一にガブリエル、次にキリスト、そして第三に再びガブリエルによってである。至聖所においてダニエルが三度触れられることは、彼が強められることを表象している。なぜなら、彼は幻を見たときには力が全くなかったが、第三の触れにおいて最終的に強められるからである。彼は、終わりの日に神の民に何が臨むかを悟るために強められる。終わりの日に神の民に何が臨むかという預言的メッセージとは、十人の乙女のたとえにおいて表象されているメッセージである。

ダニエルは無力のうちに始まる。というのも、キリストの鏡のような幻を見て全く力を失ったからである。しかし三度の接触の終わりには彼は強められ、『強くあれ、しかり、強くあれ』との命令の重複は、第二の天使、すなわち第二の試験を標示する。第二の試験は神殿の試験であり、エクセターのキャンプ集会が終わるときに『真夜中の叫び』のメッセージを宣言するため、神の民が強められるところである。その試験は神殿の試験であって、礎石にして隅の石であった冠石が、神殿の驚くべき冠石となり、かくしてその完成が標示されるのである。ダニエルは二十二日に、信仰によって至聖所に入るとき、強められる。彼がそうすると、ガブリエルが彼に触れ、次にキリストが彼に触れ、さらに再びガブリエルが彼に触れる。ゆえにダニエルは、至聖所においてメッセージを宣言するために強められるが、そこで彼は二人の天使の間におられるキリストを見る。そして、至聖所においてキリストが中央におられるその場所は贖いの座であり、二体の覆うケルビムが契約の箱を見つめ、その箱は御座に着しておられるキリストのシェキナーの栄光の光によって照らされている。ダニエル書十章の幻は預言的に構造化されており、ダニエルは、贖いの座の御座にあってシェキナーとして輝くキリストの栄光を仰ぎ見る一方、二体の覆うケルビムは契約の箱を凝視している。

ラッパの祭りの前に、エリヤは、自らの雨のメッセージが主に由来する唯一の雨のメッセージであると主張し、誰が使者であり誰がそうでないか、また何がメッセージであり何がそうでないかを証明する実証によって結末に至る予言を提示する。カルメルに至る三年半の間、アハブ王はエリヤを捜し求めていた。というのも、カルメルに先立って論争の期間があるからである。カルメル山は、品性が明らかにされる単なる試金石にすぎない。ミラー派の歴史における同期間にも同じ証しが伴っていた。すなわち、そのメッセージを憎んだ者たちが忠実な者たちを教会から締め出し、その後、忠実な者たちは、墮落し神に退けられつつあった、かつて契約の民であった者たちの中から人々を呼び出すメッセージを掲げた。

ペテロは、ペンテコステの日曜令において、ヨエルのメッセージを宣べ伝えている。すなわち、エクセターのキャンプ・ミーティングの終わりに真夜中の叫びの時期が始まるとき、ペテロは同じメッセージを宣べ伝えていることを意味する。その時期は、スノーおよびリッチのメッセージがそうであったように、ペテロの予告が訂正されたときに始まった。論争は常に予告の成就に先行する。ゆえに、その論争は予告の成就に先立って始まる。

アハブ、イゼベルとその預言者たち、キリストの時代の枝葉末節にこだわるユダヤ人、そしてミラー派の歴史における墮落したプロテスタントを不安に陥れるそのメッセージは、ペテロによってヨエル書であると特定されている。ろばを解くことによって標示される第三の試金石に先立ち、ペテロのメッセージはラオディキア的アドベンチズムから攻撃を受け、ペテロは、使者たちは酔っているのではなく、単にヨエル書全三章が彼らにおいて成就しているのだと指摘することによって、その抵抗に応答する。ヨエル書全三章は、ラオディキア的アドベンチズムに対する痛烈な糾弾から始まる。そのメッセージが強い酒に酔いしれる者たちの耳に届くとき、彼らは反応する。彼らは、キリストがエルサレムへ向かう途上で山を下っておられたときに、またエルサレムにおいても、彼に立ち向かった。

ろばが解かれ、入城が始まる。詭弁を弄するユダヤ人たちは、そのメッセージを沈黙させようとする。イエスはなお進まれ、やがて立ち止まり、アドベンチズムの恩恵期間の最終日を嘆いて涙を流される。ついでエルサレムでは、民衆にそのメッセージをやめさせようと欲するユダヤ人たちとの、さらに別の対決が起こる。その日の日没に、ユダヤ民族のための恩恵期間は、さらに一段階進んだ。抵抗の進展は十字架上の死に至るまで続き、そしてそれはラザロの復活をもって本格化した。ラザロの復活は、第二の天使の到来と待ちの時の到来とを画した。

ベタニヤはエルサレムにきわめて近かったので、ラザロの復活の知らせはまもなく都にもたらされた。奇蹟を目撃した密偵たちを通して、ユダヤ人の当局者は速やかに事実を掌握した。直ちに最高法院が招集され、いかに処すべきかを決するためであった。キリストは今や、死と墓に対する御支配を完全に顕現された。この力強い奇蹟は、神が人間に、彼らの救いのために御子を世に遣わされたことを示す、頂点をなす決定的証拠であった。それは、理性の統御に服し、啓発された良心をもつすべての精神を十分に確信させるに足る、神的権能の実証であった。ラザロの復活を目撃した多くの者はイエスを信じるに至った。しかし、祭司たちの彼に対する憎悪は一層激化した。彼らは、彼の神性を示すそれ以前のより軽微なあらゆる証拠をことごとく退けており、この新たな奇蹟にはただ憤激するばかりであった。死者は白日の下、多数の証人の前でよみがえらされた。いかなる詭弁をもってしても、そのような証拠を打ち消すことはできなかった。まさにこのゆえに、祭司たちの敵意はいよいよ致命的なものとなった。彼らはこれまでになく固く決意し、キリストの御業に終止符を打とうとした。

サドカイ派は、キリストに好意的ではなかったとはいえ、パリサイ派ほどには彼に対して悪意に満ちてはいなかった。彼らの憎しみも、それほど激烈ではなかった。だが彼らはいまや、すっかり狼狽した。彼らは死者の復活を信じていなかった。いわゆる科学を持ち出し、死体が再び生命を得ることは不可能であると論じていた。しかしキリストのわずかな言葉によって、彼らの理論は打ち碎かれた。彼らは、聖書にも神の力にも無知であることを示されたのである。奇蹟が民の心に与えた印象を取り去る方途を、彼らは見いだせなかった。墓からその死者を奪い返すことに勝利したお方から、人々をどうして引き離すことができようか。虚偽の風説が流布されたが、その奇蹟は否認し得ず、その効果をいかにして打ち消すべきかも彼らには分からなかった。これまでは、サドカイ派はキリストを死に至らしめる計画を支持してはいなかった。しかしラザロの復活の後、彼らは、彼らに対する彼の恐れを知らぬ糾弾を止め得るのは、彼

の死によってのみであると決した。『The Desire of Ages』 537.

ラザロの死は、イエスが四日間とどまれたその期間の始まりを画した。彼の死は、第二の天使の到来を表象しており、それが遅延の時の始まりを画する。彼の復活は、9/11から二十二年後に当たる2023年12月31日における二人の証人の復活を画する。彼の復活は、エゼキエルの干からびた死骨の復活を画する。彼の復活はアダムの創造によって型示されていた。それは、粘土によって表象される人性が、いのちの息によって表象される神性と結合することから成っていた。

ユダヤ人の祭司たちと支配者たちはイエスを憎んだ。しかし、多くの群衆が、その知恵の御言葉に耳を傾け、その力ある御業を目撃しようとして押し寄せた。人々は最も深い関心にかき立てられ、この驚くべき教師の教えを聞こうとして、切にイエスの後に従った。支配者の多くも彼を信じたが、会堂から追放されることを恐れて、その信仰を告白する勇氣はなかった。祭司たちと長老たちは、民の注意をイエスからそらすため、何らかの手を打たねばならないと決した。彼らは、すべての者が彼を信じるようになることを恐れた。彼ら自身の安全はどこにも見いだせなかった。地位を失うか、イエスを死に渡すかのいずれかであった。しかも、もし彼を死に渡したのちであっても、その力の生ける記念碑となる者たちはなお残るであろう。イエスはラザロを死人の中からよみがえらせていたので、もしイエスを殺すなら、ラザロがその大能を証しするであろうことを彼らは恐れた。人々は、死人の中からよみがえらされたその人を見ようとして群がり寄っていた。そして、支配者たちはラザロをも殺して、その騒ぎを鎮めることを決意した。そうして彼らは、民の心を人間の伝統と教義、すなわち薄荷と芸香に十分の一をささげることへと向けさせ、再び民に対して影響力を有しようとした。彼らは、イエスがひとりでおられるときに捕えることで合意した。というのは、民の思いが皆イエスに向けられている群衆の中で彼を捕えようとするれば、自分たちは石打ちにされるであろうからである。『初期の著作』 165頁。

2020年7月18日、黙示録の二人の証人は殺され、第二の天使と遅延の時が到来した。2023年12月31日、二段階の復活の過程が始まった。第一の段階は基礎の据え付けであり、第二の段階はその基礎の上に神殿を建立することであった。ラオデキヤ的なセブンスデー・アドベンチスト教会は、このメッセージが1989年に生まれたときからそれを憎み、今もなお憎んでいる。彼らが死んだと思い込んでいた忌み嫌われた証人たちが今や再び生きているので、彼らはそのメッセージをいっそう激しく憎むであろう。彼らは、ラザロの復活に対してユダヤ人が抱いたのと同じ毒気をもって、2020年7月18日の予言をめぐって論じ立てるであろう。神殿の試練の歴史において、ペテロは、彼らの誤った告発に対し、彼らのすべての虚偽に対する解答としてヨエル書を指し示すことによって応えるであろう。

次回の記事でこの研究を続けます。